

Katherine Anne Porterにおける愛

本 間 喜 美 子

は し が き

Katherine Anne Porter は短編小説において、おもにヒロインの愛、あるいは愛との関わりを描いているが、Porter の描く愛は愛の不毛の諸相と言い換えられるほど否定的である。Porter が執拗に愛の不毛性を追求する原因の一つに、南部出身の作家であることをあげなければならない。Porter は1890年にテキサス州のインディアン・クリークで生れ、¹⁾ ルイジアナ州の修道院の学校で教育をうけた。南部の伝統にはぐくまれた Porter は南北戦争以後、南部は解体をつづけているとの意識に悩まされている。

Porter は南部で学校教育を修了した後に、ニューヨークやメキシコに住み、1931年にはグーゲンハイム財団の研究者としてヨーロッパへ渡り、ヨーロッパの各地で生活した経験もある。Flannery O'Connor のように生涯の大部分を南部で過した作家と比べると、Porter は広い視野と鋭い歴史感覚の持主でもある。長編小説 *Ship of Fools* はナチスが興隆する直前の不安な雰囲気漂わせているように、Porter はおもに二十世紀前半の世界を作品に描いている。この時代は西欧世界が崩壊していく時代であり、鋭敏な歴史感覚で Porter は南部のみならず西欧世界全体が解体しつつあるとの認識を深めた。

Ship of Fools において、Porter は伝統的な世界観を塔のイメージで表現している。

The whole great structure built upon the twin pillars of justice and love, which reached from earth into eternity, by which the human soul rose step by step from the most rudimentary concepts of good and evil, of simple daily conduct between fellow men, to the most exquisite hairline discriminations and choices between one or another shade of faith and feeling, of doctrinal and mystical perceptions—this tower was now crumbling and falling around him, even as he stood beside the little dying fanatic gazing up at him with a condescending smirk on his exhausted face.²⁾

すなわち正義と愛という二本の対の柱で支えられ、地上から永遠へ向けて聳え立つ塔であり、それによって人間の魂は善と悪という最も初歩的な概念から一步一步向上していくという世界観であるが、Porter は現代において、この塔が崩壊の危機に瀕していると警告する。Porter は世界崩壊の危機を *Ship of Fools* のみならず、“The Leaning Tower” においても塔のイメージを用いて表現している。

It stood there in its bold little frailness, as if daring him to come on; how well he knew that a thumb and forefinger would smash the thin ribs, the mended spots would fall at a breath. Leaning, suspended, perpetually ready

to fall but never falling quite, the venturesome little object—a mistake in the first place, a whimsical pain in the neck, really, towers shouldn't lean in the first place; a curiosity, like those cupids falling off the roof-yet had some kind of meaning in Charles's mind.³⁾

Porter が崩壊する塔のイメージで表現した正義と愛を基盤とする世界観が崩壊するという事は、正義とともに愛の崩壊ということにもなる。

しかし Porter はすべての作品において、愛の充実あるいは可能性を無視して、不毛の愛のみを追求しているのではない。“*María Concepción*”においてヒロイン *María Concepción* の愛の喪失の後におとずれた愛の充実を描いている。*Ship of Fools* では、*Jenny Brown* と *David Scott* の和解を暗示して愛の可能性を示し、さらに *Echegaray* の犠牲的な愛を称讃している。この小論で筆者は Porter の作品における愛の不毛性とともにも可能性をも追求し、Porter が描く愛の諸相を考察する

I 愛の不毛性について

1922年に出版された *María Concepción* は、Porter が不毛の愛ではなく、充実した愛を描いた数少ない短編小説の一つである。しかしこの短編小説においても、Porter はメキシコのインディアンの掟に従い、不義を犯した *María Rosa* と *Juan Villegas* を罰している。*María Rosa* は *María Concepción* に殺害され、*Juan Villegas* は恋人を妻に殺害されるが、妻を憎むことも出来ず、生きながら埋葬されるような無力感におそわれる。⁴⁾

Juan's exaltation had burned out. There was not an ember of excitement left in him. He was tired. The perilous adventure was over. *María Rosa* had vanished, to come no more for ever. Their days of marching, of eating, of quarrelling and making love between battles, were all over. Tomorrow he would go back to dull and endless labour; he must descend into the trenches of the buried city as *María Rosa* must go into her grave. He felt his veins fill up with bitterness, with black unendurable melancholy. O Jesus, what bad luck overtakes a man!⁵⁾

María Rosa が墓へ埋葬されたごとく、*Juan Villegas* も希望のない、やむことのない単調な穴掘の仕事へ戻る場面で、Porter は人生の不可知な面を描出して、やがて人生の否定へと向う懐疑的な姿勢をのぞかせている。

“*Flowering Judas*”において、Porter は理想と現実の分離、政治と宗教の対立というかたちで現代を捕え、分離し、対立する両極の間で妥協を拒絶する理想主義のゆえにユダとなったヒロイン *Laura* を通して、現代における愛の不毛性を鋭く追求している。

Laura はメキシコ革命の理想に共鳴して、メキシコへ来たアメリカ娘であるが、革命の指導者である *Braggioni* を通して表現されている革命の現実と直面して幻滅している。ただし *Laura* が理想と現実の不一致のために味った深い苦悩は、はじめてのことではなく、過去に幾度も経験した苦悩であり、未来にもそのために苦痛を味わうであろうとの予感を抱いている。そこで

Laura は身を守る武器として現実の世界から遊離し、理念のみを追求することになる。⁶⁾

Laura は他の人間との関わりをいっさい拒否するので、若い大尉が愛を訴えても馬でのがれ去り、英語を教えているインディアンの子供達が慕ってもまったく心を動かされることなく、ただ子供達の愛らしい姿を見て楽しむ人生の審美的な傍観者となっている。このように Laura はいかなる人間にも近づかず、また近づけない態度を堅持することに安らぎと、力と、さらに悪へ陥ることはないという確信を抱いている。

Laura の内面には革命運動に加わりながら、革命とは相いれないカトリシズムへ引かれるという矛盾がある。Laura は作者 Porter のように、生れながらのカトリック教徒であり、カトリック教徒として厳しく訓育されたので、神に祈りを捧げる一面もある。しかし Laura が教会で祈っても、すぐその目は祭壇の荒廃や聖職者の像の欠点へ向けられ、Laura のカトリシズムへの幻滅を表現している。しかし Porter は、Laura がカトリシズムから完全に離反していないことを “Her knees cling together under sound blue serge, and her round white collar is not purposely nun-like.”⁷⁾ と逆説的に Laura に尼僧のイメージを与えつつ示している。また Laura のカトリシズムへ引かれる心は機械を拒否する態度となって表われる。革命を志す者達は機械こそ労働者を救済する手段であると機械を崇めるが、Laura はこれを否定して手編みレースの襟を身につけている。

Laura は革命とカトリシズムという対立し、和解することのない政治と宗教の二方面へ引かれることにより、革命を起こさんとする同志を内奥の世界で裏切り、革命運動に参加することによってカトリシズムを冒瀆している。モレリアにおけるカトリック教徒と社会主義者達との紛争を鎮庄に向う Braggioni に命じられて、Laura はピストルに油をひき装填する。この時 Laura の部屋に死が漂うが、Porter は Eugenio の死に、Laura が装填したピストルで射殺されるであろうカトリック教徒の死を重ね合せている。

相反する心的態度ゆえにユダとなった Laura の裏切りは Eugenio の死に結晶される。革命の同志に対する裏切りも、カトリック教徒に対する裏切りも、根本は同じで、Laura の愛の否定に起因する。⁸⁾ Laura は愛で Eugenio を救えず、代りに睡眠薬を与えて Eugenio をみごろしにしてしまう。

Porter は政治と宗教の対立を現代の憂慮すべき特質と見ているが、政治と宗教に対応するかたちで二つの理想郷を描いている。一つは Braggioni を通して、“an overripe pear” (p. 92) のように腐敗堕落している世界が革命によって破壊され、理想の国が到来するであろうと次のように予言している。

Everything must be torn from its accustomed place where it has rotted for centuries, hurled skyward and distributed, cast down again clean as rain, without separate identity. Nothing shall survive that the stiffened hands of poverty have created for the rich and no one shall be left alive except the elect spirits destined to procreate a new world cleansed of cruelty and injustice, ruled by benevolent anarchy (p. 92).

この新生の国は “cruelty” と “injustice” から清められた “justice” な世界であり、“benevolent anarchy” の支配する、すなわち愛の支配する世界である。

他方は Eugenio を通して描かれる理想郷である。物語の終り近くに、Eugenio が Laura の夢に現れ、Braggioni の “a new world” (p. 92) に対応する “a new country” (p. 93) へ Laura を導こうとする。この場合、Braggioni の革命によって誕生する生の国、“a new world” と対照的に、死んだ Eugenio の “a new country” は死の国であり、同時に人間の罪を贖うために血と肉とを与えたキリストを象徴する Eugenio の新たなる国とは神の国、天国でもある。いずれにせよ、Porter が描く二つの理想郷は、罪から清められた後に到来する愛の国である。愛の否定ゆえに Eugenio を失い、Eugenio に天国への道を示されながら、悪でみちた世に目覚めた Laura を、Porter は Miranda⁹⁾ と名を変え “Pale Horse, Pale Rider” で描いている。

Porter の作品中、愛する男女の疎外が天国と地獄の距離にまで広がったのが “Pale Horse, Pale Rider” の Miranda と Adam の愛においてである。この物語は Miranda の南部にある生家で死んだ多数の親族や、Miranda を彼岸の国へ誘うナイトの登場で始まるように圧倒的に死が支配する世界である。前線では兵士が蠅のようにぼたぼた倒れ、銃後ではインフルエンザがあたかもペストのように猛威をふるい、おびただしい数の死者が出た第一次大戦末朝のアメリカの西部を、Porter は死の世界として描いている。¹⁰⁾

Porter はこの死の世界に Adam を導入することによって、この世界を巧みに楽園追放後の世界とし、Adam と Eve の楽園追放の神話を主題に集約しようとしている。しかしこの物語では、楽園を追放されたのは Eve である Miranda のみであることが、Adam と Miranda の疎外を天国と地獄との隔りにしている。¹¹⁾

Porter は “evil” の表象である “pain” を媒介として Miranda と Adam の運命の相違を浮彫りにしている。Miranda は “I am in pain all over, and you are in such danger as I can't bear to think about, and why can we not save each other?”¹²⁾ と描かれ、戦争という悪を認識しているがゆえに悪に侵されているが、Adam は “He really did look, Miranda thought, like a fine healthy apple this morning. One time or another in their talking, he had boasted that he had never had a pain in his life that he could remember.” (p. 292) と描かれ、決して病気をしたことがない、言いかえれば悪とは無縁の存在である。Adam には楽園から追放されたとの意識が未だなく、この物語において、Adam の周囲にのみ光輝が漂い、死の世界にあって唯一人、楽園のイメージを宿している。

Porter は謔妄状態におちいった Miranda のもうろうとした意識を通して Adam の死と復活を予告しているように、“innocent” なまま、やがて楽園へ帰り行く存在として Adam を描いている。Adam と Miranda がダンスを踊る場面で、Porter は別れを惜しむ傍の男女の充実した愛を背景に Adam と Miranda の地獄をさえも共に分ちあえない疎外を鮮やかな手法で描出する。

They had cups of coffee before them, and after a long while - Miranda and Adam had danced and sat down again twice - when the coffee was quite cold, they drank it suddenly, then embraced as before, without a word and scarcely a glance at each other. Something was done and settled between them, at least; it was enviable, enviable, that they could sit quietly together and have the same expression on their faces while they looked into the hell they shared, no matter what kind of hell, it was theirs, they were together (p. 310).

理想を激しく追求する作家である Porter は、悪が猛威をふるい、人間関係は切断され、理想がふみにじられる状況に直面すると、極度の嫌悪感から死への逃避、あるいは彼岸の世界へ理想を求める傾向があるように思われる。それは“Old Mortality”の Aunt Amy の自殺の疑いのある死であり、この短編小説における Miranda の死への強い憧憬となって表現されている。Miranda がインフルエンザに患い、死の訪れを感じとった時には、Adam と“Pale horse, pale rider” (p. 317) と死への旅立ちの歌を嬉嬉として合唱し、譫妄状態におちいり、天国の幻影を見る。¹³⁾

Porter は“Flowering Judas”につづいて、この物語でも理想郷を描いているが、Miranda が見る理想郷は彼岸の世界であるから、Braggioni ではなく、Engenio を通して暗示した天国である。“Flowering Judas”で Porter は象徴的に天国を暗示しているにすぎないが、この物語では具体的に描写している。Miranda の見た天国は、この世における“identity”を放棄することを前提としている。それは汚れを洗落して、無に近い“only a minute fiercely burning particle of being” (p. 325) となることであり、新たなる“identity”を得ることでもある。人間は一人であるが全体であり、全体あるが一人であるという、孤独と連帯とが調和し、有機的な関係を保っている状態でもある。

しかし Miranda が見た幻影はあくまでも幻影であり、病が癒え、Adam の死を知った時に、幻影を見る以前にもまして、この世は死臭の漂う地獄であったのを知る。Porter は、身近に感じる Adam の霊をさえ、天国から地獄へは呼ぶまいとの悲劇的な認識に達した Miranda¹⁴⁾ を“the dead cold light of tomorrow” (p. 332) の中に放置してこの物語を終えている。¹⁵⁾

長い間待たれていて1962年¹⁶⁾にやっと出版された長編小説 *Ship of Fools* において、Porter はドイツ人、スペイン人、キューバ人、アメリカ人など国籍も種々様々なら、これらの人々の属する階級も多様で、子供から老人にいたるまで、ひろい年代層の多数の登場人物の人生航路を描かんとしている。Porter はこれらの人々を Vera という船に乗せることにより、一つの社会を構成し、¹⁷⁾ 集団の場で捕えようとしている。しかし Porter の意図にもかかわらず、Porter の視点は個人から個人へとめまぐるしく変り、おびただしい数の人物を登場させながら、これらの人物を全体像として把握していないので、散漫な印象を読者に与え、この小説が迫力を欠く原因の一つになっているのではないかと思われる。

愛の相という観点からこの小説を考察すると、Porter は、二三の例外を除き、ナチズムという悪の影響を直接に受ける Freytag と妻の Mary, Rieber や Lizzi, Dr. Schumann と La Cendesa などドイツ人とドイツ人を愛した人々の愛の不毛性を追求している。構成の上から、*Ship of Fools* は Freytag の Captain Thiele のテーブルからの追放と、スペイン人のダンサー一行による Thiele¹⁸⁾ の追放という二つの追放を軸としている。二つの追放という点を線で結ぶのが Freytag と Mary の結婚の挫折と、Rieber と Lizzi の官能的な愛の挫折である。Porter はこの二つの愛をそれぞれの挫折の原因と結果というかたちで描いている。

Porter の鋭い歴史感覚は、この長編小説の執筆にとりかかろうとしていた1930年代に、すでにナチズムの圧迫を感じとっていた。それは典型的なドイツ人の Freytag とユダヤ人 Mary の歴史に逆らった結婚の悲劇を通して表現されている。Freytag はゲルマン民族至上主義にとっぷりつかっていて、ドイツのみが故国であり、ドイツ以外の国は故国へ錦を飾って帰る仮の宿としか思えぬほど愛国心の強い男であった。その Freytag がユダヤ人と結婚したのであるが、結婚する際の Freytag の反応はまさにドイツ的であった。結婚によって Mary のユダヤ人という汚れた血が清められ、子孫は純粋なドイツ人となるであろうとの確信に基づいての行動であった。

Porter は Mary をこの小説に登場させず、Freytag の思い出を通して間接的に Mary を描写しているが、いかなる侮辱にも Freytag に対する愛で耐えうる忍耐強く純粋な女性である。Porter はこの物語に数多くの女性を登場させ、それぞれの長所、短所を描いているが、Mary を熱愛する Freytag を通して “she is a little golden thin nervous thing, most beautiful and gay in the morning, she is innocent, innocent, she makes life charming where she is, when she talks it is like a bird singing in a tree!” (p. 258) と Mary を称える時、聖母マリアのイメージを与えているのではないかと思われるほどの理想の女性にしている。

ユダヤ人と結婚した Freytag に対する圧力は二方面からの圧力である。一つはドイツ社会からの迫害と、他はユダヤ人の社会から、ユダヤ人を侮辱するためにユダヤ人の娘と結婚したとの非難である。Freytag は Rieber と Lizzi の密告で Captain のテーブルから追放されるが、日に日に重さを増してくる圧力に耐えてきた Freytag が、いかなる侮辱も愛する二人を辱しめることは出来ないとの崇高な愛の理想を叫びながら、Captain のテーブルからの追放によって何故挫折したのであろうか。Porter はその原因を Freytag がドイツ人であること、皮肉にも Freytag の意図とは正反対にユダヤ人と結婚した者はもはやドイツ人ではないとの圧迫に屈した点に求めているように思われる。追放後に Mary との出会いを Jenny に語る Freytag は次のように描写されている。

Now she knew that all along he had been talking about his wife as people talk about their dead, and in this constant reminiscence of her, he was visiting her grave with flowers and reading there the inscription he had composed for her himself (p. 306).

このように Porter は過去完了形を用いることによって、Freytag の Mary に対する激しい愛もナチズムの圧力の下で崩れたことを示している。

Rieber と Lizzi は、ドイツ民族の一面であると思われる野蛮性を、そのまま恋愛関係に移しかえたような野蛮な官能の快楽のみを求めている。船中のドイツ人の中でも二人は商売に携わっているので、商売がたきであるユダヤ人の圧力を最も強く感じ、憎悪している。二人は Freytag の妻がユダヤ人であることを Captain に密告して、Freytag を Captain のテーブルから追放する。Rieber の編集する雑誌 “New World of Tomorrow” (p. 212) はユダヤ人を追放して、ゲルマン民族のみで明日の “New World” を築くのを目的とした、まさにナチス宣伝の雑誌となっている。

Porter の諷刺はこの二人に痛烈に向けられている。いたるところで、Lizzi を “a cobra” (p. 214) や “a caged monkey” (p. 214), “a good racing mare” (p. 417) に譬え、Rieber を Hansen に殴られるたびに山羊のような鳴声をあげる “a faun,” (p. 447), “a goat” (p. 448) に譬えて、¹⁹⁾ 二人に獣のイメージを与えている。Rieber と Lizzi の関係の終焉にも Porter の筆は容赦のない諷刺を投げつける。スペイン人ダンサー一行の催す仮装舞踏会で “violence” が船を支配した際、官能とユダヤ人への “violence” を基盤として成立した二人の関係は、Hansen の “violence” によって断たれてしまう。

Freytag と Mary, Rieber と Lizzi も巨大な悪へと向かって進む歴史の圧力を受けて破滅するが、Porter は Dr. Schumann の悪への覚醒を通してこの悲劇を一層深め、広げている。

Dr. Schumann と La Condesa の愛は “Pale Horse, Pale Rider” の続編と云ってもよい

ほど Adam と Miranda の愛に似かよっている。Adam が死の世界にあって唯一人、楽園へ帰り行く人間として描かれていたように、Schumann は悪のみちた世界で唯一人、善を具現している。Porter は Schumann を、正義と愛を支柱とする世界観が確立しており、道徳と秩序が保たれ、宗教が人々の精神的支柱となっていた Rittersdorf や Schumitt, Hutten 夫妻などの旧き時代の典型的なドイツ紳士として描いているが、他方ではこれらゲルマンの血を誇る Captain のテーブルを囲むドイツ人のなかであって超然としている Schumann を描出している。これはユダヤ人や下層階級に対して偏見を抱いている人々と対照的に、Schumann は神の前に、人間は平等であると信じるカトリック教徒として、また三等船客の治療をも行なう船医として人種の偏見をほとんど持たないゆえである。しかし Porter は善である Schumann の “appearance” の下に隠された悪にたいする認識のあまさを指摘している。Condesa の取乱した姿を見ても、Schumann は “the temporary Triumph of Evil in the human soul” (p. 115) とカトリシズムの信条を想起するだけで、悪にたいする深い洞察に欠けている。

Porter は Condesa を Schumann と対照的に描写している。²⁰⁾ Schumann が冷徹なドイツ人であるのに対して、Condesa は情熱的なスペイン人であり、善を具現する Schumann に対して、Condesa は善の存在も未来への希望もいっさい認めず、“Pale Horse, Pale Rider” において、天国の幻影を見てこの世に戻った Miranda であり、楽園への願望を麻薬や睡眠薬の常用という手段で一時的にみたしている。²¹⁾ しかし Condesa は、船の支配者である Captain が贈ったシャンペンの瓶をたたきわって権力への抵抗を示しているように、否定のうえに築いた独立と力とで何物をも恐れず、いかなる妥協もしない強い面がある。

Porter は *Ship of Fools* を評して “the story of the criminal collusion of good people—people who are harmless—with evil” と語っているが、Porter のこの趣旨を最もよく反映しているのが Schumann の Condesa にたいする愛による悪への覚醒である。Schumann は内面の悪の認識に先立ち、Condesa を侮辱する罪悪感のまったくないキューバの医学生や、悪魔を擬人化したような Ric と Rac を見て、外界は悪の支配する荒地であり、この荒地において悪を糾弾する正義の叫び声をあげているのは Schumann 唯一人であるのを知る。さらに悪の糾弾者であったはずの Schumann が Condesa への愛が深まるにつれて、Condesa を真に救えず、代りに “Flowering Judas” の Laura のように睡眠剤を与えて、Condesa を崩壊させる悪に加担し、悪と共謀しているのを認識する。

外の世界と内なる世界を支配する悪を認識し、Schumann を支えていたカトリシズムも圧倒的な悪の前に無力であったのを知った時に、Schumann の崩壊がはじまる。Condesa が否定的世界を逃れ、死の世界へ Schumann を誘った時に、激しく拒否した Schumann も、Condesa を悪の虜にして官憲の手に渡す時に死を求める悲惨な叫び声をあげる。

“Death, death,” said Dr. Schumann, as if to some presence standing to one side of them casting a long shadow. “Death,” he said, and feared that his heart would burst (p. 369).

このことは、Schumann も Condesa と同じく崩壊し、死への逃避を求めていることを示している。Condesa と Schumann の崩壊を通して、Porter は現代においては愛は人間を救済する代りに崩壊に到らしめるとの悲劇的な見解を披瀝している。²²⁾

Ⅱ 愛の可能性について

おもに Porter の世界観との関連において、愛の不毛性を追求してきたが、次に愛の可能性を追求する前提として、愛の否定にたいする愛の呼びかけ、愛を拒否せんとする登場人物と愛を呼びかける人物との葛藤を通して、愛をめぐる戦いを考察する。それは“Flowering Judas”における Laura と Braggioni との戦であり、*Ship of Fools* の Jenney Brown と David Scott との愛の葛藤である。

“Flowering Judas”は Laura と Braggioni のある意味では戦の物語である。それは愛の否定と愛を回復せんとする戦いであり、理想と現実との葛藤でもある。Braggioni は“a revolutionist should be lean, animated by heroic faith, a vessel of abstract virtues” (p. 82) との Laura の理想に反して血と肉のかたまりのようにまるまると太り、権力から得られる安逸な生活を楽しみ、革命のためになぞ決して命を捨てたりしない人間である。しかし Braggioni のこの人間らしい利己主義と強烈な自己愛の反映が他者を迎え入れ、同情と愛とを与える結果となり、冷たく他者を拒否する Laura と鮮烈な対照をなしている。

Braggioni は Laura に革命とは理念や理想のみでなく、金と力で同志を巧みにあやつりながら、流血の場にのぞむ戦であると革命の現実を示しながら、革命の根底をなす人間愛を教えようとする。一箇月間妻と別居して、Laura の心に訴えようとして、ギターをかきならし、歌いつづけたのであるが、Laura の守りがありあまりにもかたく、自己充足による愛の否定の殻より引出すのに失敗する。

Braggioni は、一つには妻があふれる愛で自由を束縛するので、Laura のところに留ることにしたのだが、愛の不毛の地 Laura の家から妻のもとに帰り、妻が責めることなく、豊かな愛で迎えた時に、Braggioni は、はじめて愛にいかにか飢えていたかを知る。わずらわしいものであった妻の愛情の尊さを知り、皮肉なことに Laura ではなく、Braggioni が愛に目覚めることになる。

Porter は“Pale Horse, Pale Rider”において天国と地獄とを描き、善と悪とを妥協のないかたちで示したので、この短編小説を書上げた後に、Porter に残された道は唯一つ、煉獄への道であるように思われる。真理を求めつづけてきた Porter が、真理は彼岸の彼方にしか存在しないと確認した後に、ゆきづまってしまった。それが *Ship of Fools* の完成を遅らせた原因の一つであるかもしれない。この長編小説を執筆するにあたり巻頭で、“I am a passenger on that ship.” と Porter の姿勢を述べているが、作者もまた愚者の一人であると認めることによって、絶対の真理追求者であり、悪の告発者としての超然とした孤高の態度を放棄し、登場人物の愚かさ、欠点を分ちあい暖く見守る立場をとっている。

August, 1931 — The port town of Veracruz is a little purgatory between land and sea for the traveler, but the people who live there are very fond of themselves and the town they have helped to make (p. 3).

かくのごとく Porter は *Ship of Fools* を書き始めている。この港町は“Flowering Judas”において、官憲に追われた闘士が逃亡する町として登場するが、年代がふるいこともあって、その時には Porter は Vera Cruz と二語で書いている事実から推測すると、船名 Vera²³⁾ は Veracruz より命名したものである。そこで“a little purgatory”である Veracruz は *Ship of Fools* の世界でもある。この煉獄における愛の典型的な姿が傷つけあい、奪いあいながら

も和解へと成長していく Jenny Brown と David Scott の姿を通して描かれている。

David と Jenny の関係は “Flowering Judas” の Laura と Braggioni の関係に似かよっている。ただこの場合に人生を否定し、否定のなかに生きているのがヒロインではなく男性の David であり、Braggioni のように豊かな愛をたたえて、David のみならず、身近な人間を愛さずにいられないのが Jenny である。David は母親の愛情に恵まれなかった不幸な幼年時代の飢餓感が一つの属性となり、いかに愛されてもより以上の愛情を求めるだけで David の飢をみたすことはない。海に囲まれた船中で、もはやどこへも逃れられないとの圧迫を感じつつ、人生の “the born outsiders” (p. 125) の一人であることを認識している。

Porter は豊かな愛をたたえた Jenny を次のように描写している。

She'd run off with just anybody,—if a band passed playing in the street, she'd fall in step and march with them... would say just anything she pleased to the mere stranger—did she ever really see a stranger? Listens to just anybody, as interested in the idlest silliest chatter as she is in the most intelligent talk more so, damn it! Can't pass a beggar without handing out; her house full of stray cats and dogs—given away at last, when she left, to people who didn't want them. She would sit and listen with an eager look to that big dull Elsa mumbling along—as if Elsa were telling the most marvelous thing in the world (p. 221).

Jenny は David を深く愛しているが、幾度も冷たく拒否され傷ついている。David が人生の暗黒面を見るのにたいして、Jenny は明るい面を見る傾向がある。二人とも画家であるが二人の人生観の相違、あるいは性格の相違が色の使い方に端的に表現されている。David が黒と白を好むのにたいして、Jenny は極彩色が好きであった。この明るい Jenny も David の影響を受けるにつれて、色の使い方も暗くなり、Schumann のように人間の内奥に秘む悪を徐々に認識するようになる。

しかし Porter は Jenny に悪へ立向う力を与えている。苦しんでいる労働者を見れば Jenny はストに加わり、ピケを張ったりする。Freytag が Captain のテーブルから追放された時や、ダンサー達が盗みをした時など、見て見ぬふりをする乗客に憤慨している Jenny のこの激しい一面は María Concepción の激しさであり、Porter は Jenny に María Concepción の面影をも見ているようである。Jenny はメキシコに住んでいたことがあり、インディアンにたいして神秘的な畏敬の念を抱いている。Freytag の登場で David との不和が深刻になった時、かつてメキシコで見たインディアンの男女が争って、相互に殺しあった恐ろしい光景が夢に現れ、インディアンの男女の争いが Jenny と David との争いとなり、María Concepción のように殺害のみが David との葛藤を終らせ、憎悪を清め、愛の安らぎを与えてくれるのではないかと想像したりする。²⁴⁾

Laura と Braggioni の愛をめぐる戦は、Braggioni の敗北となるが、David と Jenny の場合には、David は他者を否定するけれども、Jenny のみ否定しえない、David にも理解しがたい Jenny のなにかに引かれ、傷つけあいながらも最後まで別れられずにいる。二人は長い航路の旅で、相互に影響を与えあいながら成長し、David は Freytag と男の友情を分って別れを惜しむほどに否定の殻から抜け出ている。この物語の終り近くで Porter は Jenny と David との和解

を暗示している²⁵⁾

They went on deck together, in the oddly changed mood of tenderness they were arriving at as if they were two strangers discovering something lovable in faces they were seeing for the first time (p. 488).

これはまた Porter が、愛の不毛地帯の長い航路の果てに、愛の兆を見出したことをも暗示しているように思われる。

David と Jenny の愛は愛と憎悪の間で揺れ動く屈折したものがあるが、Porter が Dr. Schuman を通して表現した伝統的世界観の初歩的段階である善と悪との区別が厳然と存在するが、皮肉にも西欧世界と対照的なメキシコのインディアンの社会や、²⁶⁾ 西欧世界においても社会の権力の中枢からはるか彼方に存在する世界を背景に物語を展開する場合に、しばしば愛の充足あるいは可能性を描いている。

前者は“María Concepción”の世界で、Porter はカトリシズムに象徴される西欧世界と、メキシコのインディアンの宗教、慣習に象徴される非西欧世界の対立を背景に、María Concepción の愛の喪失と回復とを描いている。勤勉で敬虔な María Concepción が何故夫の Juan Villegas に裏切られたかを、Porter は自尊心の強い María Concepción がカトリック教徒となり、村人を軽蔑し、村人との連帯を断切った点に求めている。それは Soledad の María Concepción への批判と同情の言葉に示されている。

Afterward everyone noticed that María Concepción went oftener to church, and even seldomer to the village to talk with the other women as they sat along the kerb, nursing their babies and eating fruit, at the end of the market day.

‘She is wrong to take us for enemies,’ said old Soledad, who was a thinker and a peacemaker. ‘All women have these troubles. Well, we should suffer together.’ (p. 14)

また Juan Villegas が “Now I am married to that woman in the church, and I felt a sinking inside, as if something were lying heavy on my stomach.” (p. 16) と語っているように María Concepción へある種の違和感を抱き、それが María Rosa のもとへはしらせたようである。²⁷⁾

夫が María Rosa と駆落ちしても、生れた子供がすぐ死んでも、涙一つ見せなかった María Concepción の圧縮された苦痛と悲嘆がついに爆発して、María Rosa 殺害という“violence”を引起してしまう。この“violence”は直接的には María Rosa 殺害というかたちをとっているが、その底流にカトリシズムからの“violence”による離反が暗示されている。“For me everything is settled now” (p. 20) とすべてを断念した María Concepción にはじめて愛を見出した Juan Villegas はじめ村人達が、共同体の一員として María Concepción を官憲から守るが、ここではカトリシズムの掟よりも村の掟が優先している。

Porter は María Rosa の惨殺された死体を詳細に描写した後に、“María Rosa had eaten too much honey and had had too much love. Now she must sit in hell, crying over

her sins and her hard death for ever and ever.” (p. 22) と永劫に罰せられるのは殺した María Concepción ではなく、他人の夫を奪った María Rosa であると指摘している。María Rosa の死体を見て安堵する María Concepción はもはやカトリック教徒ではない。この物語は村人の一員になりきり、夫の愛を取戻して、María Rosa の子供を、あたかも失ったわが子が帰ったように抱きながら陶酔の眠りにつく María Concepción の描写で終わっている。²⁸⁾

西欧世界にありながら、社会の実権を握っていない後者の世界は *Ship of Fools* の三等船客である群集のうごめく世界で、これらの群集はキューバの砂糖畑で働いていたが、市場での砂糖の下落でカナリー諸島やスペイン各地の故国へ送り返されるスペイン人労働者とその家族である。これらの群集の多くはカトリック教徒で、宗教に敵意を抱く “the fat man in the cherry-colored shirt” (p. 180) に挑戦され、時折こぜりあいを起し、そのたびに Captain の取締と束縛はきびしくなるが、貧困にも権力の圧力にも黙々と耐えている。

Porter はこれらの群集の良心は死んでいないことを、ひいては人間の善性をも示すために、群集の一人である Echegaray の生きとし生けるものに対する犠牲的な愛を描いている。その犠牲も一等船客から見れば、犬の Bébé を救うために海中に身を投げた愚者のうちでも、最も愚かしい者の行為となるのであるが、Porter は最もか愚な愚者が実は聖者であったとの諷刺をこめて Echegaray の死を描いている。

“Still,” said Dr. Schumann, “There is something to be done,” and he advanced with his stethoscope and sat on the edge of the grimly dirty bunk where the dead man, naked to the waist, washed and purified by the salt sea, lay at perfect ease in the state and dignity of his death (p. 317).

Porter は Echegaray に Condesa が熱望しても得られなかった死がもたらす安らぎを与えたのである。

Porter は船のイメージを “the ship of this world on its voyage to eternity” と受取っているとはじめに読者に告げているが、Echegaray を水中に埋葬する際に Echegaray の “eternity” への旅立ちを示しているように思われる。Porter は “Pale Horse, Pale Rider” で天国の光景を “She rose from her narrow ledge and ran lightly through the tall portals of the great bow that arched in its splendour over the burning blue of the sea and the cool green of the meadow on either hand.” (p. 325) と表現しているが、この光景に対応するように Echegaray の埋葬される無窮の海と冷たい水しぶきをあげながら通り過ぎる三頭の鯨を描写して、愚者達に自己を犠牲とするおおいなる愛によってのみ可能な “eternity” への旅立ちを示し、この長編小説に一つの救いを与えている。

結 語

最初に世に問うた作品は、ほとんどすべての作家にとって重要な作品であると思うが、Katherine Anne Porter の場合も例外ではない。*María Concepción* には、後に出版された作品の作風や主題の萌芽がみられる。愛という点から考察しても、Porter が “Flowering Judas” や “Pale Horse, Pale Rider,” *Ship of Fools* で追求した愛の不毛性を、“María Concepción” においてすでに Juan Villegas を通して暗示している。

Porter は “María Concepción” の終結部において充実した愛を描いた後、愛の不毛性を執拗

に追求したが、*Ship of Fools* の Echegaray の愛によってまた原点に立帰り、愛の可能性を示している。しかし Porter が愛の可能性を描く場合には、場面をメキシコに設定したり、愛を具現する登場人物を極貧の三等船客の一人に設定しなければならなかったところに Porter の悩みがうかがわれる。*Ship of Fools* において Porter が描出したように、正常な人間関係は断たれ、相互に他者を“a stranger”としか見ない愚者の群れ集まる二十世紀の西欧世界において、愛の可能性を描くことはもはや不可能なことかもしれない。*Ship of Fools* に一つの救いを与えている Echegaray の愛を描く場合ですら、Porter は Echegaray を海中に投じて尊い命を犠牲にしなければならなかった。ここに Porter の西欧世界のみならず現代世界という荒地に対する絶望がうかがわれる。

註

本稿は昭和49年10月、東北英文学会におけるシンポジウム「現代アメリカ女流作家」において、口頭発表したものを敷衍したものである。

- 1) Katherine Anne Porter は1894年生れとの説もあるが、現存の作家であるにもかかわらず、自ら履歴をあきらかにしていない点が多いので、確かなことは不明である。
- 2) Katherine Anne Porter, *Ship of Fools*, Boston: 1962, p. 373.
- 3) Katherine Anne Porter, *The Collected Stories of Katherine Anne Porter*, Bedford Square London: 1964, p. 487.
- 4) William L. Nance はこの物語の終結部における María Concepción と Juan Villegas との対照を次のように指摘している。“The end of the story finds him returned to his former narrow selfishness, sprawled in sleep while Maria sits holding the child of his love for another, which she has in a sense conceived and borne without his help by her act of murder.” (*Katherine Anne Porter & the Art of Rejection*, Chapel Hill: 1963, p. 14.)
- 5) Katherine Anne Porter, *op. cit.*, p. 25.
- 6) Nance は Laura の孤立の長所、短所を指摘している。“In Laura the principle of rejection is exposed as having over-extended itself. Through its operation she has become, for all her youth and femininity, a strong, detached, self-sufficient woman; but she has also become almost completely isolated from humanity (*op. cit.*, p. 23.)
- 7) Katherine Anne Porter, *op. cit.*, p. 83.
- 8) Eugenio に対する Laura の愛と愛の否定を Nance は次のように説明している。“The superficial story is that she loves him, and that her failure to reveal her love to him and thus give him something to live for robs her of happiness with him and leaves her that much more alone (*op. cit.*, p. 26)
- 9) Miranda は Katherine Anne Porter の分身と云われているヒロインである。Cf., “Miss Porter has made no secret of the fact that Miranda is autobiographical both in the general outline of her life and in many of its specific details.” (William L. Nance, *op. cit.*, p. 8.)
- 10) Nance は “Pale Horse, Pale Rider” の特異な雰囲気や次のように指摘している。“To begin with, it is filled with the peculiar atmosphere which characterized the United States during the First World War, with its sentimental patriotism, its distorted vision of the enemy, its sometimes brutal pressures for conformity (sic.)” (*ibid.*, p. 132.)
- 11) Nance もまた、Porter は Adam と Eve の神話を Adam にもみ適応していると語っている。“It is clear that Miss Porter consciously employs in this story some elements of the Eden myth, with its overtones of knowledge and love leading to death. The only aspect of the story in

- which the myth functions vitally is in the portrayal of the hero as an Adamic figure.” (*ibid.*, p. 136.)
- 12) Katherine Anne Porter, *op. cit.*, p. 309.
- 13) Miranda はインフルエンザに患り、重体になるが、これは Porter が実際に経験したことに基づいている。Cf., “For ‘Pale Horse, Pale Rider,’ in its central experience of near-fatal illness, is autobiographical.” (William L. Nance, *op. cit.*, p. 131.)
- 14) Harry John Mooney, Jr. は病気から回復した Miranda を “another Miranda altogether from the one she had been in the past” と呼んでいる。Cf. Harry John Mooney, Jr., *The Fiction And Criticism Of Katherine Anne Porter* (Pittsburgh : 1957), p. 31.
- 15) Mooney, Jr. は “Pale Horse, Pale Rider” を次のように定義している。 “In one sense at least, *Pale Horse, Pale Rider* is, as its title implies, a story of presentiment, a concrete embodiment of what I have called Miss Porter’s sense of disaster.” (*ibid.*, p. 25.)
- 16) Porter が *Ship of Fools* の執筆を思いついたのは、1931年にヨーロッパへ渡航した時であると Glenway Wescott は語っている。Cf., *The New York Times Book Review*, April 1. 1962, “*Ship of Fools* began with a sea voyage that she took in 1931 and specically, she says, with an account of it in a letter to her friend and fellow writer, Caroline Gordon.” (p. 47.)
- 17) M. M. Liberman は *Ship of Fools* を教訓談と見ている。 “Rather it is, I believe, in Sacks’s terms, a kind of modern apologue, a work organized as a fictional example of the truth of a formulable statement or a series of such statements.” (*Katherine Anne Porter’s Fiction*, Detroit : 1971, pp. 19-20.)
- 18) Nance は Captain Thiele を “God” と考えている。 “Some attention has obviously been given to emphasizing his role as the ‘God’ of his little world.” (*op. cit.*, p. 159.)
- 19) Liberman は Rieber に a faun” ではなく, “a pig” のイメージを見ている。 “Herr Rieber is natural enough, but that variety of nature that most distinguishes him is to be seen reflected in the face not of a man but of a pig. It is as such that he is made to be seen by the reader. His inamorata is a peahen. The point is that the author of a naturalistic novel presents the swinishness of people as typically human; the author of a realistic apologue represents the conduct of humans as typically swinish.” (*op. cit.*, pp. 26-27.)
- 20) Nance は, Porter は La Condesa を Dr. Schumann の視点より描いていると指摘し, Condesa の登場人物としての重要性を Schumann との関連において特に重視している。 “La Condesa is also of major importance for her own unique reasons, but she is seen mostly from the Doctor’s point of view because her importance is primarily in relation to him and also because she is to be kept relatively remote and mysterious.” (*op. cit.*, p. 171.)
- 21) Charles I. Glicksberg は *The Sexual Revolution In Modern American Literature* (The Hague : 1971) において, Dr. Shumann と La Condesa を対比して次のように語っている。 “Dr. Schumann believes in original sin while La Condesa, who has no use for theological discussions, rejects the myth of the Fall of Man.” (p. 153.)
- 22) Glicksberg は Freud の言葉を引用しながら, *Ship of Fools* における愛の不毛性を指摘する。 “*Ship of Fools* seems specially designed to bear out the truth of Freud’s remark : ‘There is no longer any place in present-day civilized life for a simple natural love between two human beings.’ ” (*ibid.*, p. 154.)
- 23) Vera 号は “the truth about the world” を意味すると云われている。 Cf., “While the captain represents the closest approach to allegory in the portrayal of individual character, the *Vera* is meant, in a general way, to present the truth about the world.” (William L. Nance, *op., cit.*,

p. 159.)

24) Glicksberg はこの場面で、愛と憎悪、愛と死の織成す絵模様を次のように指摘する。

"This scene recurs fitfully in her dreams, and then the dream shifts, the features of the couple change, and the faces become David's and her own! There it is symbolically presented, the cruelty that is love, the mystery of love and hate, love and death, intertwined." (*op. cit.*, p. 152.)

25) Glicksberg は Jenny Brown と David Scott との和解も全く認めていない。"Love, as is vividly illustrated by the troubled relationship between Jenny Brown and David Scott, is instinct with cruelty and conflict," (*ibid.*, p. 150.)

26) "primitive society" と "the mysterious forces" との関係を Nance は次のように指摘する。

"In this first of her published stories Katherine Anne Porter confronts the mysterious forces of nature through the transparency of primitive society and finds that these forces act most strongly through a woman." (*op. cit.*, p. 15.)

27) Liberman は D. H. Lawrence と Katherine Anne Porter を比較し、Lawrence が "the self-conscious pastoral playfulness" を楽しむ愛に、Porter は "preposterous" のみ見出すと指摘し、María Concepción と María Rosa の関係を次のように説明する。

"We regard María Rosa playing the coy nymph but from the point of view of María Concepción whose murderous feelings correct the possibility of conventional romanticism." (*op. cit.*, p. 67.)

28) Liberman は、María Concepción の María Rosa 殺害は、子供が原因となっていると考えている。"As an end she will kill a woman for a child she feels to be her own." (*ibid.*, p. 69.)

Love in Katherine Anne Porter's Works

Kimiko HOMMA

1. The Sterility of Love

Katherine Anne Porter describes various aspects of love in her short stories, but the love is so negative that we can express it in the sterility of love. The reason why Miss Porter inquires into the sterility of love seems to be due to the fact that she, born in the South, is a writer with a keen historical sense. She believes that the South has dissolved itself since the Civil War. When she saw what the western world experienced in the early twentieth century, she seems to have realized that not only the South but the Western World continues to break down.

Miss Porter has followed a high ideal, but she can not find out nothing except moral or social disintegration. She represents her disillusion through Laura in "Flowering Judas" and Miranda, heroine of a series of short stories such as "Old Mortality," "Pale Horse, Pale Rider" and so forth. Laura is in a sense responsible for Eugenio's death because she cultivates the stoicism and never returns his love. In "Pale Horse, Pale Rider" the alienation between Miranda returning to this world after having seen the illusion of the Paradise and Adam

having gone to the Paradise is that between heaven and hell. In *Ship of Fools*, a novel published in 1962, Miss Porter also describes the sterility of love in relation to Nazism.

II. The Possibility of Love

Miss Porter is apt to delineate the possibility of love when the scene is laid in primitive society or in the lower stratum of society. The former is Mexican Indians, society in "María Concepción," where there is a severe distinction between good and evil. In this short story Miss Porter tells us why María Concepción was deprived of Juan Villegas, her husband by María Rosa and then regained his heart after she killed María Rosa. The latter is the society of the second passengers in *Ship of Fools*. Miss Porter admires the spirit of martyrdom through the death of Echegaray, one of the second passengers and gives a gleam of hope to the novel describing the waste land in modern times.